



仏教のことば



ナモアミダブツ。

ナモまたはナマース（南無・帰命せよ。任せ帰つて来なさいお任せします）。不可思議な光りの世界へ、尽きない無量の命の世界へ。私たちはこの名号を、口に唱えながら、如來の願力のなかによばれている身と信楽（シンギョウ）することによって、煩惱に汚れた身を生きている現在の私のままでありながら、如來の淨土に生まれ変わることです。

仏

「仏」。目覚めた人、悟った人のことをサンクリットでは「ブッダ」と呼びました。ゴータマ・シッタルタというシャキヤ族の王子さまも修行の末、世の真理を悟つて「仏陀」になりました。そのお釈迦さまのことを中国では音写して「浮屠フト」→「仏陀」と書きました。印度から中国のこの過程で、いろいろ様々な仏・菩薩ができてきました。

ほとけ

日本へ仏教が伝來したとき、天皇は蘇我氏に百濟伝來の仏像を渡して仮に祭らせました。反対派の物部氏は、そのとき「ほとりけ」という熱病が流行したのを口実に「ほとりけ」の原因は仏教という異國の神を祭つたからだ。だから「ほとけ」は仏教を揶揄した蔑称でした。その仏像を難波の池に捨てたという記紀伝説。

「菩提樹」（サンスクリットではボジサットバ）「菩提」（悟り）をめざして励む人を指します。お釈迦さまは弟子を「同じ道を行く人」と呼び「友よ」と呼びかけられました。

衆生

サットバの中國語訳。1いろいろな生きざまをするもの。有情（うじょう）ともいう。生きとし生きる者。（衆多の生）。無量の因縁の和合によつて生きているもの（衆多因縁生）。万物、仏性を持つて生きているもの（悉有仏性としてあるものすべて）。いろいろな解釈がある。

卒塔婆

インドの古いことばサンスクリットで「墓のこと。お釈迦さまが亡くなるとき、お弟子たちは「これから何をより所として生きていけばよいのか」を嘆き迷つた。お釈迦さま（嘆くではない。これからはあなた自らをより所に歩みなさい。わたしの説いた法（真理）をより所にして歩みなさい）と遺言した。佛教ではだから本来死者を葬る墓は否定されているのです。とはいものの弟子たちは、十の国に遺骨を持ち帰り記念の「塔」（スートバ）を建てました。後々、その塔に傘をさしけ三重・五重の様式の塔を作つていきました。ことばも、ストーバからソトバへそしてトウへと変化しました。そしてそこを学問修行の拠点にしました。仏教が日本に渡ってきたときにも奈良の東大寺・興福寺・法隆寺など三重・五重の塔を中心とした寺院建築様式で建てられています。

淨土真宗では死者を弔う宗教ではないので敢えて塔のない寺院様式をたもつてゐるのであります。このように真宗門徒は、遺骨を親鸞さまと一緒に納める「納骨式」を、村々で講を組み年番で講番に遺骨を携えて上京させ、大谷ご本廟に納骨する習慣を江戸時代の昔から行つてきました。

墓

現今「墓」は仏教由来のもののように考えられているが実は全くそうではない。「古墳時代」という時代区分があるよう日本古来の習俗です。その日本古来の習俗と習合して（神仏習合といいます）できあがつているのがいわゆる「家の墓」です。いまや家族観念が薄れていくにつれて墓に対する考え方も大きく変化しつつあります。

本来淨土真宗ではあまり重視しませんでした。死者は墓地に葬り泉下に眠るのではなく阿弥陀経にある「俱会一處」（お念佛のなかですべての人も一つのお淨土で会えるのだけよ）という文を標示するのが習わしです。バカでっかい墓は、お大名は別にしてありませんでした。戦争の武勲をほこるため戦死者の墓は「陸軍大將」など位階を刻み込んだ麗々しい墓を建てるようになったのです。軍國主義時代の名残です。

阿弥陀経にある「俱会一處」（お念佛のなかですべての人も一つのお淨土で会えるのだけよ）という文を標示するか、阿弥陀経にある「自灯明・法灯明（嘆くではない。これらはあなた自らをより所に歩みなさい。わたしの説いた法（真理）をより所にして歩みなさい）と遺言した。

縁起

「縁起もの」とか「縁起の悪いことば」など日本ではこのことばが誤用、悪用されているが、本来仏教の真理「法」を示す言葉。「因縁生起」の略語。すべての物事は無量無邊のものとの関係性によつてあるもの。単独個我ではそんざいしない。相依関係のなかでしかあり得ない。逆からいえば「動かぬ真理」「個我」はない。「無我」であり流動的であり「無常」である。ところが私たちの世界は、あたかも「いつもかわらぬ世界」と見誤り、ことに「わたし中心の世界」を生きている。これが「迷妄・苦惱」の本。世界混迷の根源。現代的にいえば「自己中」から抜け出し「お影さま」の世界に生まれ変わろうとするのがお釈迦さまの教え。

七月 勝林寺 予定

一日(日) 出石組 連研 研修旅行

滋賀教区 仏婦連盟 聞法旅行

六日(金) 真覚寺 永代経

七日(土) 湯口時男宅 忽明法要

八日(日) 出石組 仏社報告総会

八日(日) 勝林寺 永代経

九日(月) 勝林寺 仏婦総会

十四日(土) 坂本光隆宅 初盆

十六日(月) 濱 隆宏宅 一七回忌

二一日(土) 出石組 寺族同朋講座

二六日(木) みのりを聞く会

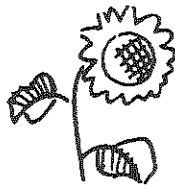
二八日(土) 宮窓一男宅 初盆納骨

二八日(土) 平野孝幸宅 初盆

二九日(日) 宮島重喜宅 三回忌

十七甲(甲) 興福寺 永代経

(敬称略)



【論語】

「論語読みの論語しらす」
昔、子供のころ遊んだ、「いろはカルタ」

にあつたことばを思い出す。

米寿になつて今、「これはほかでもないわ
たしのこと」と気づいた。

大学予科（今の高校）一年のとき藤野立然
先生から『論語集注』（朱熹の注釈本）を講

読で習つたはず。その当座は興味もあり、一
番前の席に座つて熱心に聴いたはずであつた

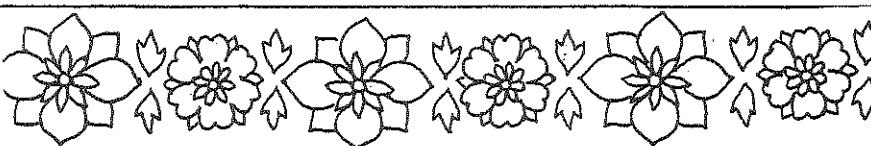
が、今思ひだそうとしても、見事奇麗に忘れ
てしまつてている。

覚えていいる範囲内でおさらいをしてみた。

孔子さまが晩年、過ぎこし方を振り返つて述べた言葉。（年齢を云うのに現在でも利用されている）

子の曰（のたまわ）く「吾れ十有五にして学に志す。三十にして而して立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順がう。七十にしてこころ欲する所に従つて矩（のり）を踰（こ）えず。

十五才になつて「よし、勉強しよう」と学問への意欲を奮い立たせる。でなければ志学の歳になつたとは言えない。三十歳になつて親のお世話にならぬ一人立ちしていないようではその歳になつた値打ちがない。四十なつてもこれからいかに生きるのか迷つてゐるようでは困つたものだ。五十歳になつて自分の天命、生きる意味・意義が自覚できないようではその歳になつた値打ちがない。六十歳になると人様の言葉・心に耳傾けられる人格になる。七十歳になると、思いどおりに振る舞つても自然と世間のルールを外れることはない。そんな人格に仕上がりつてゐるはず。志学・而立・不惑・知命・耳順・還暦。なお日本ではこのうえに、七十七歳を喜の略字から喜寿。八十八歳米寿。八十を傘寿九十を卒寿。九十九歳を白寿等と云う。肝要なことは自分の今と照らし合わせて論語のことばを考えることだ。



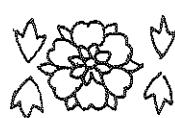
永代経法要ご案内

勝林寺「永代経」を勤修いたします。

七月八日（日曜）午後七時半

九日（月曜）午後一時半

講師：西光義香 師



平成24年度勝林寺佛教婦人会総会および
物故者追悼法要のご案内

とき 平成24年7月9日（月曜日）午前9:30～

ところ 勝林寺本堂

内容 平成23年度会務・会計報告

平成24年度会務計画

物故者追悼法要

記念法話

懇親会

会費 一人500円

持ち物 急珠 式章 聖典

申し込み＊地区評議員さんを通じてお申し込み

ください

ぜひ、お誘いあわせの上、

お参りください。



（文責
坊守）

子の白（のたま）わく「学びて時にこれを習う。
亦（また）説（よる）ばしからずや。朋（とも）あ
り、遠方より来る。亦た樂しからずや。人、
知らずして懼（うら）みず、亦た君子ならずや。」

先生が云われた。人生三つの楽しみ。

学んだことを、時にふれ自分でやってみる。

これまた。ここに浮き立つことはない。（学

習の喜び） 血をわけた兄弟のような朋（とも）が久方ぶりに遠方より尋ねて来てくれた

その時の何ともない喜び楽しさはなにに譬え

ようか。人様が自分を知つてくれないので対

し、ここに怒らないのは、なんと凡人では

できない君子の業（わざ）だね！

「学習」とは学んだことを実践すること。

「習」の字は、雛鳥が親の姿を見習つて羽ばたく姿の象形文字。「朋」の字は、骨肉を分けた兄弟のような友。一人でもそんな友を持ちたいもの。外間に生きるな。「自分」に生きることが出来たらなー。

太子の妻の織つた「天寿国曼陀羅」には太

子のことばとして「世間虚偽 唯仏是真」

（この世界はウソ。いつわりに満ちた世界。

そのなかにあってただ仏様だけが眞実のより

所）。苦惱のなかに生き、ひたすら平和を願つた、太子の声が今でも聞こえる。勝林寺の本

堂に書道家山田正直先生の額が掲げてある。

親鸞さんは「和國の教主聖徳王」とよんで

和讃を沢山つくって尊崇した。

す。和ヲ以テ貴（とうとし）とな

先日泊まつたホテルの床の間に掲げてあつた額にあつた言葉。

聖徳太子の十七條憲法第一條のことばで、

続いて「忤（あらう）なきを以て宗（むね）とせよ。

太子は用明天皇の王子であつたが皇室の内紛のため天皇にはならず生涯推古女帝の攝政として終わつた。大陸文化を攝取、平和國家をめざして仏教の移入に貢献したがその後、政争の中、その子山背王子一族もろとも滅ぼされた。

太子の妻の織つた「天寿国曼陀羅」には太

子のことばとして「世間虚偽 唯仏是真」

（この世界はウソ。いつわりに満ちた世界。

そのなかにあってただ仏様だけが眞実のより

所）。苦惱のなかに生き、ひたすら平和を願つた、太子の声が今でも聞こえる。勝林寺の本

堂に書道家山田正直先生の額が掲げてある。

親鸞さんは「和國の教主聖徳王」とよんで

和讃を沢山つくって尊崇した。